明治期の文語文と口語文

教材のねらい

この教科書では、古典（古文・漢文）と近代の作品の間に、明治期の過度期の文体の特徴を示す文章を、五編紹介している。江戸から明治への転換は、さまざまな「社会」のあり方、「制度」の変革であると同時に、「言葉」の世界における大きな変化の時期であった。

言葉の記録として伝えられた作品や文書のあり方も、新時代のメディアの変革と共に拡大し多様化していった。それを支える人々もさまざまで、変革期ではいつ頃どのような教育を受けたかによって、その表現も変化していった。学校で漢詩文による教育を受けた世代が、数年後には英語など外国語も学んでいくといった変化も見られる。ここに出した五人の個性的な表現を考える時、どういう教養の基盤を持っている人なのか、何歳の時の表現なのか、どういうメディアによってその表現が定着されているのかなど、いくつかの要素を考える必要がある。

「古文」「擬古文」から「言文一致体」までの変化の概略は、ぜひ生徒に伝えたい。それが、わずか二十年ほどの期間で急激に変化したこと、そうした中で近代の文学者は表現の質を高め、新しい世界を開拓していったことを理解してもらえるとよいと思う。

和歌や古典文学の素養の上に立って、樋口一葉は、会話を地の文に組み込み、一文の長い文体で心情の揺れを描く。北村透谷になると、漢文の用語と、西洋文化に支えられた概念が結び付き、格調のある文体が達成される。自由民権運動の清水豊子の演説口調は、文語体でありながら動きのある心情を伝え、きびきびしている。幕末から高座にかけていた作品が明治の速記本によって活字で伝えられた三遊亭円朝の落語は、臨場感豊かな描写が新鮮だ。そうした動きの中で、二葉亭四迷が言文一致の文体を小説に応用し、新しい心理小説、写実小説を確立する。二葉亭であっても「浮雲」を書き始めたときはまだまだ古い感じの表現だが、書きながら言文一致を磨いていく。教材本文は、その変化がなされた後の文例なのである。

近代小説の世界でも、森鷗外「舞姫」は、文語文であっても、使われている概念は新しい時代のものだ。かえって、その緊張関係が作品の魅力となっている。この五編だけでなく、明治の名作を多く紹介しながら、文学者の実験の様を伝えていきたいものである。

評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。〔知・技〕(2)ア
(3) 時間の経過や文化的特徴などによる言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。〔知・技〕(2)エ
(4) 言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めている。〔知・技〕(2)オ
(5) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容について叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(6) 進んで明治期の文語文と口語文を読んでさまざまな文体の特徴を知り、今までの学習を生かして、近現代の文体や文章が古代からの文脈の延長線上にあることを理解しようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

（中島国彦）

指導計画案

展開	導入	展開	まとめと発展
指導上の重点目標	1 文体や文章の変遷をたどることを通して、我が国の言語文化に対する理解を深めさせる。	2 明治期の文語文と口語文を読み、さまざまな文体の特徴を学ばせる。 3 古典編・漢文編の学習と合わせて、和文脈・漢文脈の延長線上に近代の文体・文章が成立していることを理解させる。	
学習活動	① 「〔参考〕明治期の文語文と口語文」の序文（一七七ページ）を通読する。 知技	① 樋口一葉「大つごもり」（一七七・上14～一七八・上15）を通読する。 知技・思判表 ② 北村透谷「我牢獄」（一七八・上16～一七九・上4）を通読する。 知技・思判表 ③ 清水豊子「敢て同胞兄弟に望む」（一七九・上5～下12）を通読する。 知技・思判表 ④ 三遊亭円朝「怪談牡丹灯籠」（一七九・下13～一八〇・上16）を通読する。 知技・思判表 ⑤ 二葉亭四迷「新編浮雲」（一八〇・上19～下20）を通読する。 知技・思判表	① 各文章の文体の特徴をまとめる。 主態
指導上の留意点	序文で触れられている各作家の文体の特徴を理解したうえで、各作品を通読させる。音読や範読などを通して音声から文体の特徴を感じさせるのもよい。		

大つごもり　樋口一葉

作者

樋口一葉

本名はなつ（なつ子、夏、夏子）。東京府に生まれる。幼少期から学びたい意志は強かったが、当時は女性が教育を受ける機会は限られており、家が経済的に豊かでなかったこともあって、一時は中断した。一葉の強い希望により、明治十九（一八八六）年、父の知人の紹介で、中島歌子の歌塾「萩の舎」に入門した。和歌や平安王朝の物語、千蔭流の書などを学ぶが、周囲には華族や政治家の夫人や令嬢が多く、肩身の狭い思いをしたことが日記に記されている。

長男である兄の病死、父の死が打ち続き、次兄もそれ以前に勘当されて家を出ていたことから、明治二十二（一八八九）年、十七歳で、母と妹からなる家を背負う戸主となった。当時の法律では、原則として戸主になるのは男性であり、女性がなるのは例外的な状況に限られていた。同じころ、萩の舎の先輩である三宅花圃が、小説『藪の鶯』（明治二十一）を書き、出版した。小説は新時代のメディアであり、原稿料が得られることにも惹かれ、小説執筆を志す。妹の伝手をたどり、新聞小説の書き手であった半井桃水を訪ね、弟子入りする。桃水のバックアップを受け作家デビューをしたが、職業としてすぐに軌道に乗るわけではなく、周囲の中傷などにより桃水からも離れた。

注目され始めたのは、『文学界』に「雪の日」（明治二十六）を掲載したころからである。生計のためには、並行して吉原遊郭近くの下谷龍泉寺町（現在の台東区竜泉一丁目）で雑貨店を営んだり、萩の舎での教授を手伝うなど苦心が続くが、新進の雑誌であった『文学界』に集う作家たちとの交流も開かれ、「たけくらべ」（明治二十八～二十九）は森鷗外の高い評価を得た。作品は、女性をとりまく閉塞的な境遇を生きる主人公たちの複雑な思いを雅文体で描く、独自な境地に進んでいた。しかし、既に結核にかかっており、当時の医療では治療もままならず、亡くなった。作品には、「大つごもり」（明治二十七）、「にごりえ」（明治二十八）、「十三夜」（明治二十八）など。

出典

本文は『樋口一葉全集』第一巻（筑摩書房　昭和四十九）によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

語句の研究

●一七七ページ

キー・ポイント　上14 大つごもり　大晦日。江戸期から続く慣習で、借金などを清算する期限。

キー・ポイント　上15 三之助　主人公のお峰はすでに父母を亡くし、伯父伯母に引き取られたが、伯父は病に倒れ、今は零落している。三之助は、伯父伯母の息子で八歳。お峰とは姉弟のような間柄。既に蜆売りをして家計を助けている。三之助の様子や伯父からの伝言には、この家族の誠実さがうかがわれる。

上15 白銀台町　現在の東京都港区に存在した地名。

下14 仕儀　ことのなりゆき。

キー・ポイント　下15 約束の物　お峰が伯父に、奉公先からお金を借りるように頼まれた、その金。

下15 御新造　ごしんぞ(「ごしんぞう」の音変化)。他人の妻を呼ぶ語。古くは武家で使われたが、だんだん富裕な商家でも使われるようになった。ここでは、お峰の奉公先の山村家の奥様。

下16 子細　詳しい事情。

下18 追羽子　羽根つき遊び。

下18 余念なく　夢中で。

●一七八ページ

キー・ポイント　上1 若旦那　奉公先の山村家の長男石之助のこと。

上6 硯の引出し　かけ硯の引き出し。かけ硯は、硯や墨を入れておく箱で、下に引き出しがついて小物などを入れる。

上6 束　ここではお札の束。

キー・ポイント　上8 見し人なしと思へるは

愚かや　「愚かや」は語り手の評価。近代小説は三人称の場合、次第に語り手の人間らしい特徴を減じ、カメラのように出来事を写すことを目指していく。このように語り手の存在感があるのは独特の形式。

鑑賞

主人公のお峰は、奉公先・山村家の主人の人使いが荒くても、誠実に務める人柄である。父母亡きあとに面倒を見てくれた伯父伯母を大切に思い、伯父が病に倒れたというので心配しているが、奉公人には見舞う自由もない。やっとのことで駆けつけると、働けなくなり借金をした利子のため、大晦日までに山村家からせめて二円借りてもらえないかと頼まれる。

窮状を見て請け合うお峰だが、山村家は富裕でも普段から他人には金を惜しむたちで、勇気を出して御新造に頼んでみたものの、御新造は機嫌が悪く、冷たくあしらわれる。御新造の機嫌が悪いのは、先妻の息子で気まずい仲の石之助がこの時は家にいたからである。石之助は自分をないがしろにする家族関係が面白くなくぶらぶらと遊び暮らしているが、貧乏な仲間に金をばらまくのが道楽という男である。

抜粋は、今日が伯父にお金を渡す約束の大晦日であるのに、御新造は貸してくれぬまま出かけてしまい、お峰が途方に暮れるところに三之助が受け取りにきて、切羽詰まったお峰が引出しから金を盗んでしまう場面。道順を教えられて使いに来た三之助は、姉の迷惑になることを心配しながら、親の窮状が助かる期待で素直に喜んでいる。それを見たお峰は金が借りられなかったとはとても言えず、自分一人が悪人になればいいことと覚悟を決めて金を盗んでしまう。そこに至る逡巡が表現されている。

文章は一息につなげられているが、三之助の姉や父を敬う口ぶりと、年上の思いやりを見せる姉の口調が「　」を使わずに描き分けられている。それらのセリフから動作の描写へ文章はなだらかにつながり、その中で、三之助の視点や心中、お峰から見える情景や心中が切り替わり、それぞれの立場を立体的に浮かび上がらせている。

物語はこの後、石之助が帰宅した父親に金をせびって家を出てゆき、その後大晦日の恒例として家にある金高を勘定するところで、お峰は自らの悪事の露見を覚悟し、伯父伯母に罪を及ぼさないためにどうすればよいか死ぬような思いをする。だが引き出しを検めると、残りの金も全てなくなっており、「引出しの分も拝借致し候　石之助」という書付が見出される。石之助が知らずにしたことか、お峰の行動を知っていてかばったのかはわからない。

新時代のメディアである小説は、概ね言文一致体を志向したが、それは、一葉がこれまで学んできた文体とは大きく違っていた。また、男女の従う規範がことごとく異なっていたそれまでの常識からすれば、女性らしくないと言われる文体でもあった。一葉は、学ぶ先達もいないまま、伝統ある雅文体に近代的な思考を盛るべく試行錯誤した。同時期に再評価された井原西鶴の文体も学んでいると言われる。

（小平麻衣子）

我牢獄　　北村透谷

作者

北村透谷

本名は門太郎。相模国小田原に生まれる。祖父は藩医であったが佐幕派ゆえに没落、父は東京に出て官立の昌平学校で学び役所に職を得た。透谷が十二歳の時に一家は数寄屋橋近くに移り、後の雅号「透谷」（すきやばしとうこく）へとつながる。泰明小学校では校長に認められ、明治十五（一八八二）年、卒業式で「空気及び水の組成」と題して演説した。

卒業前から自由民権運動に感化され政治家を目指した。旅を好み、神奈川県議会の臨時書記や横浜グランドホテルのボーイをしたり、東京専門学校（後の早稲田大学）に入って読書に励んだ。そして大矢蒼海をはじめとする三多摩地方の民権運動家たちと交わって、優勝劣敗思想との対決色を強めた。しかし明治十八（一八八五）年、運動資金調達のための強盗への参加を大矢に求められて離脱、言論によって理想を訴える道を模索する。

明治二十（一八八七）年夏、三多摩の民権派名士・石坂昌孝の娘・美那との激しい恋愛体験とキリスト教入信により、思想生活に一大転機を迎える。翌年の結婚後には、自由律叙事詩『楚囚之詩』(明治二十二)を自費出版するも破棄、明治二十四（一八九一）年、現世を支配する大魔王からの誘惑を拒絶する劇詩『蓬莱曲』を刊行して、粗削りながら真率な内面的苦悩を表現し、日本近代詩史に大きな足跡を残した。

透谷は西洋人によるキリスト教の伝道や出版活動の通訳・翻訳・編集に多く携わっていたが、明治二十五（一八九二）年二月、巌本善治の「女学雑誌」に評論「厭世詩家と女性」が掲載されたことで、新たな価値観を有した文学者として広く印象付けられた。明治二十六（一八九三）年一月、同誌派生の「文学界」の創刊に関与して、島崎藤村たちと近代日本におけるロマン主義の思潮をリードし、硯友社グループや幸田露伴による江戸文学回帰や、民友社グループによる事業的な文学観に対峙し続けた。この時期は硬質な漢文訓読調の文語体で鋭い評論を書くことが主であるが、少ないながら小説や叙情的な詩も残している。しかし二年足らずの充実した評論活動の最中、様々な事情が重なり、明治二十七（一八九四）年に自宅で縊死した。

出典

本文は『明治の文学』第16巻(筑摩書房　平成十四)によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

語句の研究

●一七八ページ

キー・ポイント　上17我が悲恋　「我牢獄」の「我」は、実際の牢獄に入っているわけではない。しかし「第一期」の「自由」な状態を過ぎた「第二期」の「我が悲恋」における魂の状態は、まさに「捕繋」されていることと同じであると嘆いている。

上17凛々たる　身に染みて寒い様。

下1九腸　腸全体、はらわた。

下3籠中　かごの中。

キー・ポイント　下3我が半魂の行衛　恋人同士の引き裂かれた魂が求め合うというイメージは、プラトン『饗宴　愛について』のプラトニック・ラブをめぐる議論において喜劇詩人アリストファネスが唱える説を想起させる。アリストファネスによれば、古来、人間は背中合わせで「男・男」「女・女」「男・女」のいずれかが一体化している完璧な存在だったが、神ゼウスの怒りに触れて真っ二つに引き裂かれ、その半身を求めて現世を彷徨っているとされる。失われた半身を憧憬し求めることがエロースであり、その実現のためには神に従うことを薦められる。

下3血涙　ひどい悲しみや憤りのために出る涙。『韓非子』「和氏」に由来する。

下4雷音洞主　幸田露伴の別号。「我牢獄」が対話的に扱おうとしている露伴の「風流悟」（『国民之友』明治二十四・八）の初出時の筆名は「雷音洞主」である。

キー・ポイント　下4風流　上品で優美な趣のあること。優雅なおもむき。みやびやかなこと。また、そのさま。詩歌を作り、その趣を解し、あるいは趣味の道に遊んで世俗から離れることにもいう。この時期の露伴は「風流」という言葉を多用している。ここでは特に「風流悟」（『国民之友』明治二十四・八）を念頭に置くか。

キー・ポイント　下4恋愛　明治初年頃より英語 love の訳語として、「愛恋」「恋慕」と共に用いられたが、明治二十年代には「恋愛」が優勢となった。

下6捕繋　捕まえて獄につないでおくこと。拘束、繋留すること。

キー・ポイント　下10デンマルクの狂公子　デンマークの王子ハムレットのこと。シェイクスピア（一五六四～一六一六）の代表作の一つである五幕悲劇「ハムレット」（一六〇一頃）の主人公。ハムレットが狂ったふりをする場面もあるが、ふりであるのか本当に狂っているのかを、周囲は判断することができない。明治二十四（一八九一）年六月、横浜でのミルン一座による「ハムレット」を観劇した際、後にシェイクスピア劇を全訳する坪内逍遥と出会い、自宅を訪問する機会を得ている。また、透谷をはじめとする「文学界」周辺の文学者たちはシェイクスピアへの興味を共有していた。

キー・ポイント　下10我母が我を生まざりしならばと　「ハムレット」三幕一場では、ハムレットがオフィーリアに向けて、有名な「尼寺に行け」の台詞を言い放った後、

「I am myself indifferent honest; but yet I could accuse me of such things that it were better my mother had not borne me:」と続ける。

下11打ち喞たしむるのみ　（「打ち」は接頭語）恨み嘆かせるばかり、何かのせいにして不平を口にさせるばかりである。

下12黄鳥　鶯の異名。特に高麗鶯を指す。漢詩に用いられる。

下16愁涙　つらい悲しみのために流す涙。

下16蒼頬　青白くなった、蒼白となった頬の

意か。

キー・ポイント　**下16 闌干**　縦横に散り乱れるさま。涙の盛んに流れ出るさま。唐代の詩人・白居易の「長恨歌」（八〇六）には、「玉蓉寂寞涙瀾干」（玉容寂寞として涙瀾干たり）とある。「長恨歌」は玄宗皇帝の楊貴妃に対する悲恋の想いを一二〇句にわたり壮大に描いた長歌であり、『源氏物語』をはじめ日本文学への影響が大きい。例えば『保元物語』には「涙瀾干として魂飛揚すと見えてあはれなりし」とある。涙と魂の組み合わせは、「我牢獄」にも響いているか。

鑑賞

「我」を語り手とした一人称の短編小説であるが、前半部分では「もし」を繰り返すことで、聞き手がいるかのような、その「我」の苦悩を誰か（読者を意識するか）に訴えかける仕掛けになっている。引用部分は、すでになぜ現在の状況が「我牢獄」と言い得るのかをしっかりと説明した後の結末部近くであり、徐々に終わりなき苦しい生よりも甘美な死へと自らを引き寄せていく勢いが、リズムのある漢文訓読調の文語体によって表現されている。「女学雑誌」に画期的な評論「厭世詩家と女性」を掲載されたのが明治二十五（一八九二）年二月であり、その四か月後、「我牢獄」は同誌六月号に掲載されている。小説という透谷にしては珍しいジャンル（生涯に三作のみ執筆）を採用し、すでに透谷の評論を知っていたかもしれない同誌読者に訴えかけたいものがあったはずである。ただし、本作には付記があり、「旧作を訂し」たものであること、「篇中の思想の頑癖に至りては或は今日の余の思想とは異なるところなり」とことわっている。付記での自称詞は「余」であり、「我牢獄」については過去の「思想」として相対化している点を考慮した上で、その求心的な内容と形式を読む必要があるだろう。

本作は十四の形式段落（①～⑭で表記）で構成されているが、①では自分は虫も殺せないほどに臆病だが「我は牢獄の中にあ」ること、②では獄吏さえいない天然の独房であることが説かれる。生まれながらに牢獄にいたわけではないが、確かに「自由」を謳歌できた「故郷」と呼ぶべき第一期があり、現在は牢獄に囚われた第二期だが、「故郷」を想起できるから希望が持てているとする（③）。たまに牢獄に見舞いに来る名誉・権勢・富貴・栄達は「我」に対する獄吏と言えるが（④）、牢獄で出会うこれらの世俗的価値を天使だと勘違いする人々もいる（⑤）。シェイクスピアがハムレットに仮託したように、「我」もまた天地の間を這う愚か者に過ぎないが、しかし現世的なことには満足できない（⑥）。⑦では露伴の「風流」論を意識しつつ、「我が心宮を観ずること」は難しいが、「風流」すなわち「趣味と称する魔力」も信頼できず、獄吏か天使であるかは判断できないと述べる。

⑧からが本作の核心である。「我」が牢獄にいると気付いた時には、牢獄には「我が霊魂の半塊」が残り、「故郷」に残りの半部が引き裂かれてある。普段は「故郷」を忘却しているが、ただ一つ、「悲恋を湊中すべき者」がいたことは記憶しており、時間が経つにつれて「我が悲恋」はいや増すのみだとする。⑨では、「我が牢獄」と「故郷」の構造が語られる。「我恋ふ人」に初めて出会った時、「我霊魂」の半部は失われて彼女の中に入り、同様に「彼女の霊魂」の半部も失われて「我」の中に入ってしまった。しかし、現在の牢獄の「我」の中にある二人の半部同士では「円成せる霊魂」を有することはできず、「故郷」にいる彼女のそれぞれの半部がお互いに必要なはずなのに、二つの世界を行き来することはできない。⑩では、夢で逢えたと思っても、すぐに恐ろしい悪夢へと変じるが、それでも現実より眠りの方が慰められると漏らす。

引用箇所は⑪と⑫に当たるが、漢文学の教養（白居易）と西洋の教養（シェイクスピアと恐らくはプラトン）を動員しながら、

露伴の「風流」論ではやり過ごすことができない「悲恋」の「無風流」な苦しみを、歯切れのよい文語体で構築していく。ここでは、「恋愛」に囚われたことと「牢獄」に囚われたことは恐らく同根なのだが、その必然的な矛盾が、「我を殺す」ように仕向けながら、「死す能わざる」意志も「我」に発現させているという「狂」に肉迫する。しかし、「黄鳥」の声によって一瞬生じる「恋人の姿」の幻では満たされることのない「悲恋」を活写し、さらに⑬で「我」は中国の伝説の仙女の力でも満たされないことを述べ、⑭では「死」に導かれ、遂には「我」は読者に「おさらばなり」と告げる。

小説のかたちを借りることで、「我」の極端に観念的な「悲恋」への衝動が収斂していく地点まで描き切った。引用箇所は、特に心的世界において理屈が袋小路を形成する過程を追っている。新たな価値観や観念に対する、いわば「我」というプリズムを通した試験運用の記録とでも呼びたいような鮮烈さが、西洋の言葉を巧みに取り込む漢文訓読調に共存する。ただ、露伴文学の理解が一面的である点には注意が必要であろう。『透谷と近代日本』（共編、翰林書房　平成六）所収の平岡敏夫「透谷と明治二十年代小説――ひとつの反省・「風流悟」と「我牢獄」」が参考になる。

（小澤　純）

敢て同胞兄弟に望む　清水豊子

作者

清水豊子

号は紫琴。岡山県に生まれる。京都府立第一高等女学校卒業。明治十八（一八八五）年、自由民権派の弁護士・岡崎晴正と結婚し、ともに自由民権運動に携わる。明治二十年、奈良で開かれた民権派の集会に初めて登壇して以降、演説を行った。次第に、民権を男性のみでなく、女性も得るべく、女権運動にかかわるようになる。背景には、晴正が当時の慣習に倣い、他の女性とも家庭を持っていたことによる悩みがあり、明治二十一（一八八八）年に出会った自由民権運動家の植木枝盛（うえきえもり）が、女権を推奨する立場だったことに影響を受けた。豊子は、男女同権とともに、一夫多妻を否定する主張もした。私生活では、明治二十二（一八八九）年、晴正と離婚した。直後には京都で、女権拡張について千八百人の聴衆を前に弁じたと言い、新たな出発を思わせる。明治二十三（一八九〇）年には、当時の先進的な女子教育の雑誌であった『女学雑誌』記者となり、明治二十四（一八九一）年には、小説「こわれ指環」を発表。作中女性の一人称で、離婚に至るまでの心境を描いた。意図しない男性との関係などの波乱も経たが、明治二十五（一八九二）年、農芸化学者の古在由直と結婚した。明治三十年代半ばには執筆から遠ざかった。

出典

本文は『紫琴全集』全一巻（草土文化　昭和五十八）によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

初出は『興和之友』明治二十二（一八八九）年。興和会は、奈良の民権運動の団体であり、『興和之友』は、その機関誌。ただし、『紫琴全集』に収められているのは、その草稿と考えられている。草稿では、夫という立場が家庭内で理不尽とも言える権力を持って妻を抑圧しているが、そこに法律も及ばないことを批判し、国政における自由より先に家庭における解放を主張している。対して、発表されたものでは国会開設を見据えた同権の主張が大きいという違いがある。ここでは流布している『全集』版を採用した。

語句の研究

●一七九ページ

上5同胞　実のきょうだい。同じ国民、同じ民族。

キー・ポイント　**上6暁ニハ**　ここに限らず、「ニ」「ハ」が現在統一されている平仮名とは異なる字体で書かれている。木版から活字への移行期には、このように複数の仮名が並行して使われていた。

上7必竟　さまざまな経過を経ても最終的には。結局。

上8立憲政体　憲法を定め、議会を通じて国政を行う政治形態。

上9知悉　ことごとく知っていること。細かい点まで知っていること。

上12浸害　ここでは、侵害、つまり他人の権利や所有などをおかすこと。

上14揚々乎として　得意げに。誇らしげに。「乎」は、状態・様子を表す語に付けて、語調を強める助字。

上14繊弱　かよわいこと、たおやかなこと。

上14乗して　乗じて。つけこんで。

上15抑圧を逞ふせん　要求や行動に対する押さえつけをほしいままにしよう。

キー・ポイント　**上18これあに論理に適したるものならんや。**　明治開化期には、近代化の尺度として論理的であることが求められた。女性については感情的で知性に乏しいというステレオタイプが広まっていたが、この文章では男性の人権論者の矛盾を整然と指摘している。

下1奥妙の理　奥深くとらえるのが難しい物事の道理・道筋。

下2大見識家　物事の本質を捉え、確かな判断をする能力を持った人。

下3便宜　好都合。

下3器械　装置・道具。「機械」が主に動力装置を内蔵したものに使用されるのに対し、「器械」は動力装置を持たないものに使用する。

下4玩弄物　おもちゃ。慰みものとしてもてあそぶもの、人。

下4妾　一人称の人称代名詞。女性がへりくだって使う。近世では武家の女性が使った。

鑑賞

自由民権運動が主張した憲法制定と国会開設は、明治十四（一八八一）年の明治天皇による国会開設の詔勅に基づいて、明治二十二（一八八九）年に大日本帝国憲法が発布され、明治二十三（一八九〇）年に国会が開設されることになっていた。この実現を目前に、世間の注目が集まる時期に発表された文章である。自由や立憲政体を求める人々は「人権」が尊重されるべきことを知るはずであり、「人」とは男女を共に含む言葉であるにもかかわらず、女性を抑圧する男性がいるのはどうしたことかと、論理的に問いかけている。

この時の選挙権は、十五円以上納税する二十五歳以上の男子に限定されていたことはよく知られるが、これは全人口の一パーセント程度に過ぎない。文章では、数少ない国会議員を目指せる人に向けて、得られる力をどのように使うか問いかけているが、男性の多くも政治の意思決定に参加できない状況を背景にしていればこそ、「人」はすべて同じだとして、女性の抑圧への共感を引き出すべく訴えかけている。当時の「女権」は、論者によって、女性参政権の要求にも、基本的な人権の意味でも使われている。本抜粋では、日常生活の隅々に及ぶ男性から女性への圧迫を問題にしているので、後者と言える。

自由民権運動においては、演説会を開き、主張を聴衆に広めることが行われた。演説には特徴的な口調が生み出されたが、書き言葉である評論においてもそうした特徴は移され、インパクトを与えている。本抜粋でも、「ならずや」「あらずや」といった問いかけが多く用いられて読み手に同意を求めており、「その通り！」「違う！」など掛け声をかけたくなるような文体である。

先行するテクストとして中島湘煙（文久三〈一八六四〉年～明治三十四〈一九〇一〉年）の「同胞姉妹に告ぐ」（明治十七）があり、これを意識したことがみてとれる。中島湘煙も民権思想家であり、「自由燈」や「女学雑誌」を中心に論説を発表したが、若くして肺結核で亡くなった。「同胞姉妹に告ぐ」は、教育や財産所有など広い話題について、男女が同権であるべき論理を明示し、男性が力で女性を抑える非を説き、愛情の重要性を述べた。中島が女性たちに論理への目覚めを呼びかけたのに対し、本教材では、権力を持ち、女性の人権を制限している男性に「敢て」「同胞」と呼びかけ、彼らの変化を求めている。

引用以外の部分には、「我等女子たるものは必しも吾々の兄弟諸君即ち我国の男子諸君にのみ依頼して自由を享受し権利を獲得せんと欲する者にあらず我等女子たる者の勉むる所によりて其志を達せんと欲するものなり」、つまり女権の拡張は自分たちの努力によって進めようと思っている、という主張もあり、意気が感じられる。

（小平麻衣子）

怪談牡丹灯籠　三遊亭円朝

作者

三遊亭円朝

本名は出淵次郎吉。江戸の湯島切通片町（現在の文京区湯島四丁目）に生まれる。父は落語家の橘屋円太郎。七歳の時に小円太の名で寄席に初出勤し、父の師匠である二代目三遊亭円生に入門。十三歳の時に浮世絵師歌川国芳のもとで絵を学ぶ。二十歳の頃に道具を用いる鳴り物入りの噺を工夫する。寄席に出勤した折、円朝の用意した噺を師匠の円生が先に演じてしまうことが続き、それをきっかけに自ら噺を創作するようになったとされる。二十一歳の時に初めて創作した怪談噺「累ね草紙」は、現代に伝わる「真景累が淵」の原型かと推察されている。明治三十三（一九〇〇）年に六十二歳で死去、谷中の全生庵に埋葬された。代表作に「怪談牡丹灯籠」「真景累が淵」のほか、「塩原多助一代記」「怪談乳房榎」「名人長二」「心眼」などがある。

円朝の口演した噺の多くは明治十五（一八八二）年頃から普及する速記術によって書き取られ、単行本（速記本）や新聞連載のかたちで発表された。全集に、春陽堂版「円朝全集」（昭和元～三）、角川書店版「三遊亭円朝全集」（昭和五十～五十一）、岩波書店版「円朝全集」（平成二十四～二十八）がある。詳しい年譜は岩波書店版「円朝全集」別巻二を参照されたい。

出典

本文は「円朝全集」第一巻（岩波書店　平成二十四）によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

『怪談牡丹灯籠』の初出は明治十七（一八八四）年に東京稗史出版社から出版された全十三編の単行本である（三遊亭円朝口演・若林玵蔵筆記）。旗本の飯島平左衛門と下男の黒川孝助を中心とする敵討ちの物語と、平左衛門の娘お露と浪人の萩原新三郎を中心とする怪談とが交互に語られる構造になっており、掲載箇所はお露・新三郎の怪談の一部である。

東京稗史出版社から同年に出版された別製本には、春のやおぼろ（坪内逍遙）が序文を寄せており、「句ごと文ごとにうたた活動する趣ありて、宛然（さながら）まのあたり萩原某（それ）に面合はするが如く阿露（おつゆ）の乙女に逢見る心地す」と、作中人物をありありと描き出す円朝の芸を称賛している。

語句の研究

●一七九ページ

下14 蚊帳　就寝時に寝床へ蚊が来るのを避けるために、室内に吊って用いるもの。麻製のものが一般的。

下15 節穴　木の板の節の部分が抜けてできた穴。

キー・ポイント　下15 牡丹花の灯籠　牡丹の花の飾りがついている灯籠。灯籠は、枠に紙を貼ったものの中に灯火を入れた照明具。屋外で用いる。この場面は八つ（午前二時頃）の出来事を描いている。深夜、女中のお米が灯籠を手に提げ、主人のお露の足もとを照らしながら歩いてくる。暗闇のなかに、灯籠の花飾り、振り袖の秋草模様、長襦袢の緋色など、華やかな装飾や色彩が照らし出されている様子を想像しながら読みたい。

下16 文金の高髷　文金高島田。武家の女性が結う髪型。ここではお露が文金の高髷に結っている。

下17 緋縮緬　緋色の縮緬。緋色は濃い赤色。縮緬は絹織物の一種で、布地の面に細かなでこぼこがある。

下17 長襦袢　襦袢は和服を着る際に肌着として着るもの。上半身から腰あたりまでの長さのものを半襦袢といい、上半身から下半身までの長さのものを長襦袢という。

下19 焼熱地獄　原文の表記は「焼熱地獄」だが、仏教語としては「焦熱地獄」が正しい。焦熱地獄は八大地獄の一つで、殺生・偸盗・邪婬・妄語・飲酒・邪見の者がおちる地獄。

キー・ポイント　下20 御札　御符。新三郎が新幡随院の良石和尚から幽霊除けとして授けられたもの。

下20 陰鬼　幽霊。

鑑賞

まずは、冒頭から「焼熱地獄に墜ちたる苦みです」まで、新三郎が戸の節穴から外を見る様子（「新三部は…覗いて見ると」）、新三郎の見た幽霊たちの姿（「毎時の通り…緋縮緬の長襦袢」）、新三郎の心情（「其綺麗な事…苦みです」）が、ひと続きに語られている点に注意したい。語り手は、はじめは新三郎の様子を俯瞰的に語り、途中から新三郎その人になりかわったように語っている。ここには、一人の落語家が作中の情景を描写し、かつ登場人物をも演じるという落語独特の自在な語りが見られる。後半の幽霊たちの描写もこれと同様である。まずはその行動が描写され（「萩原の家は…後へ下がり」）、次いで幽霊どうしの会話になる。会話の場面では、落語家は一人で二役を演じ分ける。

次に、登場人物の心情の対比を味わいたい。前半では新三郎の恐怖心が、後半ではお露の恋情が焦点化されている。新三郎はお露が幽霊であるとは知らずに家に招き入れ、逢瀬を重ねたが、隣人からお露が幽霊であることを知らされると心変わりし、良石和尚から授かった海音如来のお守りを身につけ、幽霊除けの御札を家に貼り、雨宝陀羅尼経を読んで幽霊の来訪を避けようとする。掲載箇所は、新三郎が御札を家に貼った後、蚊帳の中でお経を読んでいると、お露と供の女中のお米が新三郎の家に来るいつもの時刻（八つ＝午前二時頃）になり、二人の足音が聞こえて家の前で止まったので、新三郎が恐怖をおぼえながら節穴から外を見る場面である。新三郎にとってお露は、もはや恋人ではなく恐怖の対象であるが、お露からすれば新三郎の突然の心変わりが理解できない。「逢せてくれなければ私しは帰らないよ」という発言にお露の切ない恋心を見るか、執着心を見るかは、読み手によって分かれるところだろう。正解をひとつに定めず、自分はどう感じるか、なぜそう感じるかを考えさせたい。

なお、牡丹の灯籠を提げた女性（幽霊）が恋人の男性のもとに通う話は明の『剪灯新話』「牡丹灯記」を源流とする。これを翻案した物語に浅井了意の仮名草子『伽婢子』（寛文六）の「牡丹灯籠」があり、円朝はこれに拠っている。詳しくは延広真治「怪談牡丹燈籠」（『幽霊名画集』ちくま学芸文庫）を参照されたい。

（佐藤至子）

新編 浮雲　二葉亭四迷

作者

二葉亭四迷

本名は長谷川辰之助。別号として冷々亭杏雨・四明。尾張藩士・長谷川吉数と志津の嫡子として江戸市ケ谷の同藩上屋敷に生まれる。作家・翻訳者・編集員・大学教授・教頭・商店顧問・間諜・新聞記者・学者・実業家など、様々な職業を転々とした。

江戸、名古屋、松江などで育ち、ロシアの南下政策を憂慮して陸軍士官学校を受験するも三度失敗し、外交官を志望して東京外国語学校でロシア語を学ぶ。そこでロシア文学の魅力を知るが、同校が東京商業学校（現在の一橋大学）に合併されたため、明治十九（一八八六）年に退学、『小説神髄』（明治十八）等で文名を高めていた坪内逍遥の元に出入りし、実相を以て虚相を写すことの重要性を説く『小説総論』を構想、本格的なリアリズム小説の祖であり言文一致体小説の先駆ともなる『浮雲』（明治二十～二十二）を「第一篇」から「第三篇」まで発表した。また、明治二十一（一八八八）年のツルゲーネフ「あひゞき」等の口語訳は、国木田独歩をはじめ、後続者に多大な影響を与えた。

しかし『浮雲』の執筆過程で思想的動揺があり、小説を中絶して内閣官報局に入って、翻訳などの業務に約十年間携った。明治三十二（一八九九）年に東京外国語学校教授に就任したが、日露問題に直接関わっていきたいという志は強く、明治三十五（一九〇二）年にはウラジオストックに渡り実業を視野に入れて活動するも支援者と対立、さらに北京で警察学校の事務長となったがここでも支援者と対立して、日露戦争が勃発する前に帰国した。明治三十七（一九〇四）年、朝日新聞社に入社して久しぶりの小説執筆となる『其面影』（明治三十九）や『平凡』（明治四十）を発表、夏目漱石などとも交流した。明治四十一（一九〇八）年、朝日新聞露都特派員としてペテルブルグに向かったが不眠症に悩まされ肺結核を患い、翌年、日本への帰国中にベンガル湾上で客死した。

出典

本文は『二葉亭四迷全集』第一巻（筑摩書房　昭和五十九）によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

語句の研究

●一八〇ページ

上19 心附いて　気が付く、考えが回る。正気づく。

キー・ポイント　上19 お勢　文三の下宿先の娘で従姉妹にあたる。母親のお政は、文三が官吏を免職になるまでは二人の結婚を視野に入れており、お勢も学問のできる文三に関心はあった。しかし「第三篇」第十九回の段階では、文三の同僚で処世術にたけた本田昇からの誘いに強く心動かされている。語り手はお勢の性質が「軽躁（かるはずみ）」であることを示している。

キー・ポイント　上20 文三　内海文三。明治十年代に流行した政治小説では登場人物名がその性質や役割を表現していることが多かったが、内海文三・本田昇・お勢・お政といった名前もそれに準ずるか。文三はお勢に想いを寄せてきたが、免職後、下宿での立場を徐々に失っていき、復職の手助けを昇が申し出ても頑なな態度をとり、お勢との関係にも決定的な齟齬が生じてしまっている。

上20 感染れて　影響を強く受ける。

上21 畏縮た　ちぢこまって元気がなくなる。

キー・ポイント　上21 理性　感情に走らず、道理に基づいて考えたり判断したりする能力。明治期、西洋からの啓蒙主義で盛んに用いられた。

キー・ポイント　下1 認識　認め知ること。物事をはっきり知り、その意義を正しく理解・弁別すること。明治期、哲学や心理学の用語として盛んに用いられた。

下2 奮見する　激しく外に現れる。

下3、　シロテン、白抜き点、批点などと呼ばれ、主に読点と句点の中間の半終止符として、明治二十年代頃によく用いられた。欧文のセミコロンに相当し、ロシア文学の厳密な翻訳を試みていた二葉亭は、創作でも用いた。しかしその後、一般には定着はせず、昭和二十一年、文部省の表記ガイドラインに掲載されたものの、今日でも用例は極めて少ない。

下3 境界　各人をとりまく境遇。境涯。精神・感覚の働きによりもたらされる状態。

下5 放心　心配することをやめること。安心。放念。

下5 世を渡る　生活する。世の中で暮らして行く。世を過ごす。

下8 潮界　互いに異なった性質の海流が接触する境界、あるいは川水と海水の境。物事一般の境界。

下8？　疑問符、クエスチョンマーク。江戸時代後期、蘭学者によって欧文の句読点の研究が始まり、前野良沢は「問点」と訳した。明治期の日本語文に頻繁に用いられ定着した。

キー・ポイント　下8 此危い境を放心して渡ツてゐて　明治期には、「浮雲い」と書いて「あぶない」と読むこともあった。「放心」を「うつかり」と読んでいるが、下5の「放心」とは意味がずれながら同じ漢字を用いることで、お勢の性質の様々な現れ方を示しているか。

キー・ポイント　下11 眠つた本心　ここではお勢の本来の心のあり方を指すと思われるが、文三の期待が込められたお勢の「本心」が仮構されているように読むことができる。

鑑賞

四迷の執筆開始時の意図は、中心点を持てない明治期の近代日本の浮動性を典型的な人物の配置と展開によって批判することにあったとされる。そこには同時代の風俗を巧みに写しながら人間存在の滑稽さを活写したロシアのニコライ・ゴーゴリの影響がある。

「第一篇」では、まさに明治十年代の政治小説の主人公のエリート性を剝奪された内海文三の思い込みを外部から鋭く揶揄する語りが目立ち、式亭三馬などの風刺に適した文体を借用したことが指摘されている。また文三とお勢のやりとりには巌本善治が主宰した「女学雑誌」が代表するロマンティック・ラブ・イデオロギーの影響が見られるものの、お勢の理解が一面的でしかないことがその後の展開で明らかになり、文三のお勢への一方的な崇拝的眼差しも滑稽味を帯びてくる。「第二篇」では、免職後に窮地に追い込まれていく文三と周囲の会話のすれ違い、それぞれの登場人物の性質や心の動きを巧みに示す地の文の語りが、共に三遊亭円朝を参考にしたこなれた言文一致体で表現され、ドストエフスキーのように多声的で緊張感に富んだ言語空間を形作っている。

引用箇所は「第三篇」の最終回にあたる「第十九回」の終わり近くである。お勢との許婚に近い関係性はお政から暗に否定され、お勢からも昇へと魅かれているという決定的な言葉をすでに浴びせられていた。にも拘らず、文三は「妄想」に捉えられるかのように、現在の自分自身の現実を正確に把握できず、まるで下宿先の家父長になったかのような視点から、お勢の今後を案じようとしている。

「第一篇」の頃と比較すれば、文三はお勢の「軽躁」な性質をある程度気付いていることは確かであるが、自分が下宿において父のように「お勢の病」の「境界」に介入し、昇から家族を守る立場にあると誤認している点を、語り手は坦々と示している。ここで重要なのは、現在、お勢が「外」ばかりでなく「内」からの理由で昇に惹きつけられた点を分析するだけでなく、過去において「文三に感染れて」いたことも語り手が明示することである。「お勢の眠つた本心」とは、文三からすれば、昇に傾いたお勢の気持ちを自分へと引き戻すことを暗に含意しているはずだが、そもそも文三へのかつてのお勢の敬意もまた、「感染れ」に過ぎなかったと暴露する。しかし「第一篇」と比べれば、語り手は文三の思考・心情へと寄り添っているように思われる。それはまた、「刺激」「理性」「認識」といった、特に心理学を彷彿とさせる学術的な語彙がお勢の分析に用いることとも関連してくるだろう。「第十九回」の続きでは、文三がかつて学んだ心理学の錯覚をめぐる知識が想起される場面があり、両者が共通の知的基盤に立っていることが仄めかされる。ただし、文三と語り手は、お勢の性質への分析的視座を共有しつつ、お勢と文三自身の現実の関係性をめぐって、その「認識」はずれざるを得ない。

「第三篇」の語り手は、「第一篇」とは大きく異なり、ほぼ文三から見える現象のみに限定して世界を描写し、時に文三の内的独白を模写したような語りも導入するが、文三自身の意識の死角にある不都合な事実も、的確に記述していくのである。語り手

は、いわば文三の「妄想」の生成を正確に記述しながら、文三に何が見えていないのかを指し示す。そしてまた、読者には、どこかで語り手にも見えていない場面を想像する余地を与えていくのである。十川信介「二葉亭四迷論　増補版」（筑摩書房　昭和五十九）、小森陽一「文体としての物語・増補版」（青弓社　平成二十四）、同「構造としての語り・増補版」（青弓社　平成二十九）、ヨコタ村上孝之「二葉亭四迷」（ミネルヴァ書房　平成二十六）が参考になる。

（小澤　純）